

与路島の人びとの交流の歴史(与路校にある遺物から)

本校の資料室にある昔の遺物を見てみたら、与路島には古い時代から他の地域や外国からの物が入ってきていることがわかりました。与路の人びとは昔から活発に交流していたようです。代表的な遺物をいくつか紹介します。

① 提砥(さげと)

鎌倉・室町時代(約600~800年前)に使われていた携帯用の砥石です。長方形の板のような形で、一方に穴が空いています。役人たちが仕事で旅行する際に腰帯からヒモでつり下げて、**小刀を研ぐのに使っていた**ようです。紙が現代のようにたくさんなかった昔は木片や竹片に小刀で字を刻んで記録することが多かったようです。折れてしまい一部しか残っていませんが、20cmぐらいのものと考えられます。与路島の人が使っていたのか、島外の人が使っていたのかは不明です。



本来はこんな形



② 白磁の皿(はくじのさら)

中国(南宋)からの輸入品です。当時の日本では生産できない**高級食器**です。日本に持ち込まれた当初は身分の高い人達が使っていたのでしょう。きれいな草花文様が刻まれています。黒潮に乗ってやってきた船に積まれて、南西諸島から九州西岸にかけてひろくもたらされています。特に博多には大量に輸入されています。源頼朝が鎌倉幕府をひらいた頃(1192年)のものです。



このあたりで焼かれたもの

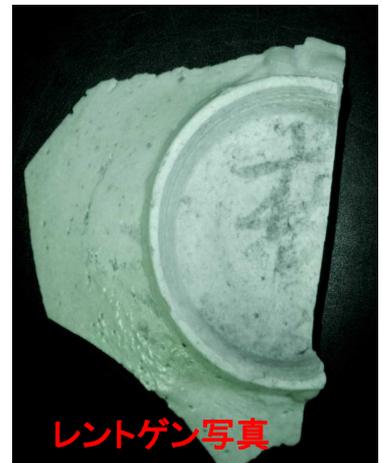


本来はこんな形

③ 白磁の碗(はくじのわん)

②と同じ時期に中国(南宋)からの輸入品です。平成28年11月に校内で発見しました。やはり当時の日本では生産できない高級食器です。裏を見たらなんと、持ち主(?)が**筆で書いた字**が残っていました。当時、漢字が書ける人は限られていますから(役人や坊さんなど)、やはりこれも身分の高い人が与路にいてこれを使っていた、または外部(博多)から持ち込まれたということが考えられます。レントゲンで撮ったら複数の文字(荘?)が確認できました。この時代の文字のある遺物は奄美では今まで発見されなかった大変珍しいものです。奄美の歴史に新たな1頁が加わるかもしれないものです。

奄美の新発見か?!



レントゲン写真

④ 青磁の碗(せいじのわん)

中国(南宋)の龍泉(りゅうせん)という地域一帯の窯で焼かれたもので、白磁と同様に当時の日本では生産できない高級食器です。草花文様が刻まれているものもあります。これも源頼朝が**鎌倉幕府をひらいた頃(1192年)のもの**です。白磁に比べて青みがかったため青磁と呼ばれます。ちなみに上野の国立博物館には平清盛の息子の重盛や足利義政が所有していた青磁の碗(馬蝗絆という銘があります)があります。



馬蝗絆(ばこうは)



龍泉はここ

⑤ カムイ焼の壺(かむいやきのつぼ)

カムイ焼とは与路島のすぐ南隣にある**徳之島の南部**(現在の伊仙町)で11~14世紀にかけてつくられていた黒っぽい色の陶器で、甕(かめ)や壺が多いようです。鹿児島本土から石垣島までの南西諸島の広い地域で使われていました。朝鮮半島の影響を受けた焼き物と考えられています。与路の海岸では今でもカムイ焼の破片を見ることができます。



本来はこんな形

⑥ 薩摩・苗代川焼の壺(さつま・なえしろがわやきのつぼ)

薩摩焼は約400年前に豊臣秀吉の朝鮮出兵の時に、これに参加した島津氏が、朝鮮の陶工を鹿児島に連れ帰り、焼かせたものが起源となっています。薩摩焼はいくつかの系統に分類され、現在の日置市美山地区で焼かれたものを苗代川焼といいます。本校にあるこの苗代川焼の壺は明治以降の新しい時代のもので、石灰質のものが胴体にこびりついていますが、これは島に船で運ばれる途中で、何らかの理由で**海に落ち、島の人がそれを拾い上げて使っていた**ということが考えられます。



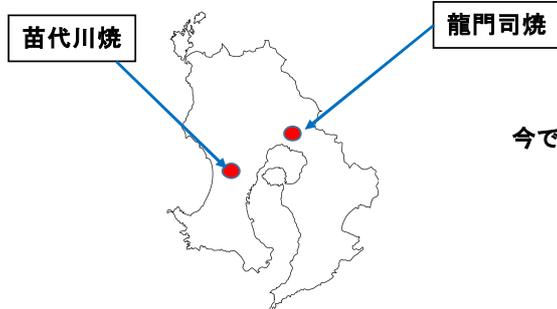
⑦ 薩摩・龍門司焼の壺(さつま・りゅうもんじやきのつぼ)

現在の始良市加治木町小山田地区で焼かれた薩摩焼を龍門司焼といいます。やはり約400年の歴史があります。この黒い釉薬のかかった壺は初期のもので17世紀前半期のものと見られます。また、**同じ窯の中で焼かれた茶碗が熔着**していますが、壺が原型を留めていたのでそのまま商品として与路島に搬入されたものでしょう。非常に珍しいものです。



⑧ 薩摩・龍門司焼の小瓶(さつま・りゅうもんじやきのこびん)

この小瓶は明治以降の新しい時代のもので、いろいろな用途が考えられますが、**甕(びん)付け油等を保管する容器**ではないかと考えられます。現代だったらさしずめ玄関先に飾ってある「一輪ざし」というところでしょうか。



今でも売ってます



⑨ 日本海軍 水平見張用15倍12糎双眼望遠鏡(にほんかいぐんすいへいみはりよう15ばい12センチそうがんぼうえんきょう)



瀬戸内町は戦時中、南方戦線に向かう艦船の中継地または戦略的要衝として**町内各地に軍事施設**が建設され、現存するものも多いです。与路島にも海軍の砲台、銃座その他の施設があり、建設時は無報酬で島民(小学校2年生以上の児童も)は駆り出されたようです。この望遠鏡は本来艦艇に搭載されていますが、この施設でも使用され、終戦後に持ち出されて現在まで伝わったものではないでしょうか。重さ10kg近くあり、接眼レンズは欠損していますが、対物レンズは2個ともついています。戦後、同様のものが遠洋漁船にも使われています。

⑩ 手斧(ちょうな)

大工道具です。現在は殆ど見られませんが、昭和30~40年代までは使われていました。14世紀の初頭に描かれた『春日権現験記』で当時の職人が使っている様子が確認できます。数百年間 形状が全く変わっていません。与路の大工さんが使っていたものを寄贈して頂きました。民具として掲載しました。



春日権現験記

⑪ 琉球焼の壺(りゅうきゅうやきのつぼ)

沖縄本島で焼かれた無釉焼締めの壺で液体の貯蔵のために用いられていました。よく見ると肩の辺りに写真のような印があります。これは窯印(かまじるし)と言い、共同の窯で壺や皿を焼いたとき自分のものが分かるように付けた印です。与路にはこの他に蔵骨器である厨子甕など沖縄のものも使われています。高さ約46cm



窯印

